



設立趣意書

一般財団法人
千里パブリックデザイン

日本最初の大規模ニュータウン・千里ニュータウンは再生が進んでいます。

しかし、経済原理のみによって町が上書きされていくだけでは、「ニュータウン」は、しっかりと人々の心の中に根を下ろした魅力ある町にはなりません。

日本が人口減少時代に入った今、大都市圏でさえも、町は「選ばれる」ものになりました。そこに必要なことは、過去の記憶をつなぎ、本質を再発見し未来を創造する、いきいきとした「継承の連鎖」です。「千里は立地が抜群だから決して寂れはしない」というだけでは、ただ便利なだけの無味乾燥な町になってしまいます。便利なだけの郊外拠点では、都心のほうがより便利だという「醒めた視点」に対して、異なった魅力をアピールできません。「継承の連鎖」にはさまざまな要件がありますが、具体的な「場所」が必要です。

私たちは、千里ニュータウンの情報発信拠点として吹田市が2012年9月に開館した「吹田市立千里ニュータウン情報館」の企画展示に携わる任意団体として、2014年「情報館ファンクラブ」の名で市民数名によりささやかにスタートしました。以来、企画展の業務委託を中心に経験を重ね、2016年にはより広汎な「千里のまちづくり」に資するグループへの発展を願って、任意団体のまま「千里パブリックデザイン」へと改称しました。

さて、2006年、吹田市立博物館「千里ニュータウン展」において、市民による実行委員会が大きな成果を上げたものの、一時的な委員会では継続性に課題を残しました。地域の記憶を継承するためには、やはり市民目線の常設的な実行団体が必要です。

そして、この間にも千里ニュータウンは開発当時の関係者の高齢化により資料の散逸も懸念される状況が続いています。それは千里にとってのみならず、日本のニュータウン、郊外都市開発が記憶を失うことでもあります。一方で同館には日本国内のニュータウンのみならず海外からも視察者が訪れ、この「記憶の継承」に普遍性があることを示唆しています。それはまさに「千里レガシー」といえるでしょう。

そこで、私たちは一般財団法人千里パブリックデザインを設立し、この巨大な人工都市が紡いできた貴重な文化的資産、ソフト面を含めたノウハウを再発見し、継承し、未来のまちづくりに生かすため、行政との信頼ある連携のもとに、よりしっかりした体制で臨みます。

それはただ「千里ニュータウンのためだけ」ではなく、より広汎なエリア、国内外のニュータウン・郊外都市にとっても応用性のある、シンボリックな発信の場とする所存です。

2020年12月